

“エコラベル”をもっと知ろう

アマタ(株) 持続可能研究所主任研究員 田村典江 さん

インタビュー・構成：なかじま・みつる



●プロフィール

(たむら・のりえ) 1

1975年兵庫県生まれ。
京都大学大学院農学研究
科応用生物科学専攻博士
課程卒。2006年、アマタ
(株)入社、持続可能経済研

究所主任研究員。専門は水産学・資源人類学。総合地球環境学研究所・共同研究員。コモンズ研究会世話人。

【リード】今回は、漁協漁村のこれからを考える時に参考となる二つの考え方を紹介します。

一つは、漁業という産業を従来の第一次産業のとらえ方から、漁村を含む自然領域を、多様に活用し地域力や智恵で仕事づくりにつなげる「自然産業」として位置づけようという提案です。

一つは、漁協といえども地球規模の影響をこうむる（グローバリズム）時代になりました。このような時代だからこそ、地域や日本や世界の環境を少しでも改善させるために参加する手法「MSC ラベル」（MSC 漁業認証制度）の提

案です。漁業者から消費者に「環境に配慮して生産しています」と意思表示し経営改善につなげる考え方です。

漁業界では、まだなじみのうすい二つの考え方を広めようとしている若手研究者集団「アマタ」の持続可能経済研究所主任研究員・田村典江さんにわかりやすく語ってもらいました。

“自然産業”としての漁業

——漁業という産業を「自然産業」と位置づける、自然産業とは新しい考え方なのか。

わたしは大学で水産学を専攻し、フィールドとして漁業現場を歩いてきました。つとめた会社が「アマタ」といって、もともと資源リサイクルを仕事にした会社で、「廃棄物」を、焼却したりそのまま「廃棄」するのではなく、他の工場で原料に使えるようにするにはどうしたらよいかという、再資源化に取り組んできました。

◎ アマタ(株)のHP：

<http://www.amita-net.co.jp/index.html>

企業の環境化に取り組んできたアマタですが、その次のステップとして、自然資源再生のノウハウを生かし、持続可能な経済の仕組みを考え、地域づくりや農林水産業を元気にするための提案を行なう目的で「持続可能経済研究所」を2年前に設立しました。私はそこで、研究員として仕事を始めました。

◎ 同社持続可能経済研究所のHP：

<http://www.amita-net.co.jp/aise/index.html>

わたしたちの目指そうとする社会経済の仕組みで重要な柱が「自然産業」の考え方です。日本の自然資源を持続的に利用しながら、これまでの農林水産業の、生産・加工・販売することだけではない、「有形無形」のいろいろな価値となるものを生み出す「自然産業」の定義によって、新しい仕事づくりにつながるプランを提案していきたいと考えています。

——漁村の過疎化や担い手不足、経営悪化と難題を抱え、なかなか漁業の未来を考えられません。多面的機能という考え方に焦点があたっています。

漁業漁村の多面的機能論にも通じますが、じつは、漁業を自然産業としてみていきますと、漁業自体の一番の特徴が多面的産業の性格をもともと持っていることに注目すべきです。わたしの祖父は漁師をやっていたが、父は漁師がいやで町に出て別の仕事につきました。自分の

生い立ちが、現在漁業がたどってきた道と重なっていますから、「痛み」も「良さ」も肌でわかる場所があります。

戦後50年、漁業漁村が本来持っていた多様な広がりや役割が、流通経済が高度に発達するなかで、採った魚を売ることだけに収斂（しゅうれん）されたことの反動が、現在来ているような気がします。

漁師は“カッコいい”存在

——田舎はどちらなのですか。

香川県坂出です。瀬戸内海に面して、祖父はサワラの立て網漁の漁師でした。夏休みに田舎に帰ると、祖父の船に乗せてもらうことが楽しみで、魚をとらせてくれた。その原体験が今のわたしの仕事の原動力になっています。

子どもの眼からみると、祖父の漁をする姿は魔法使いそのもの。カッコいいなあ、漁師はすごいなあ、将来は漁師の話を聞いて歩く仕事につきたいと思いました。大学で漁船に乗りたい友人が船に乗るとみんな感動します。漁師はカッコいい。父は、船酔いし、海の仕事を避けましたが、世の中には、漁師や海の仕事をきつたってやりたい人はいると思います。

今回のテーマとはすこし離れますが、漁協は人材不足の話題が出ると、いつも思うのは、大学の水産を専攻し、海の現場に出て仕事をした

い人を何人も知っていますが、仕事がなく、しかたなく東京に出て食品会社に就く友人を見ってきました。複数の漁協で一人の水産の専門家を雇えるような時代がこないでしょうか。わたしの尊敬する先輩に、兵庫県明石の林崎漁協で水産専門職として仕事についていた鷺尾圭司さんがいます。

漁業を「自然産業」として、自然環境を生かした新しい仕事を創出しようというときに、きっと鷺尾さんがつけてくれた道が生かされるような気がしています。忙しい漁協の職員さんたちに代わって、海と人との新しいかかわりを現場で担当する「海（漁村）のしごと人」のような海の仕事を担う人材が必要になる時代がきてほしいと思います。

それが、漁師をカッコいいと思ってきた、わたしの「自然産業」づくりのビジョンを考える元になっています。

漁村と市民つなぐエコラベル

——次に自然産業にエコラベルをどのように機能させていくのでしょうか。そもそもエコラベルとはどういうものですか。

自然資源は無限ではありません。有限であり、そればかりか、水産資源をみると、これまでに使い切ってしまったり、少なくなったりします。限られた資源の環境の中ですこしでも長続きす



る「持続可能な利用」の方法を見つけ出し、その手法を実践していく時代がいます。

アマタ株式会社 HP より—上・FSC マーク
と、下・MSC ロゴマーク

有限で少なくなりつつある自然資源を、なんとか長続きさせて利用していくような農林水産業の経済活動を作り出そうというのが「自然産業」の提案ですが、実現させる一つの手法がエコラベルです。

エコラベルの代表的存在である、「エコマーク」を使ってご説明しましょう。ここに品質・デザインまったく同じ2本のボールペンがあります。1本には一定の基準に合致した製品で、「エコマーク」がついています。もう1本にはついていません。エコマークがついていたからといって、書き味が良いとか耐久性が優れているわけでもありません。

エコマークつきボールペンは、「環境にやさしい配慮をして作っています」という意思表示の印がついているのです。製造過程でたとえば水を節約したり、リサイクル原料を使ったり、電力消費も少なくしているなど、エコマークを管理する団体が定めた「環境負荷を小さくする」基準に従って認証されているわけですね。

消費者がどちらの商品を選ぶかは、消費者に委ねられます。消費者が、積極的にエコラベル製品を選び購入することで、企業活動を通じて、社会全体の環境への影響が小さくなっていく仕組みです。

この仕組みの面白さは、消費者の選択が社会を動かすところにあります。「環境への影響を小さくする」ことを考えたとき、政府が排ガス規制や廃液規制をする場合は、トップダウン的に「規制」することで達成しようとしています。

エコラベルはどうでしょうか。商品にエコラベルを付けるか付けないかは、生産者の自由意志で決められます。消費者の環境意識が高まっている時代だからこそ「マーケティングツール」（営業戦略）として価値がはかれるというわけです。ヨーロッパでは、初め工業製品にエコラベルが付けられるようになり、今では農林水産業にも浸透しつつあります。

——日本ではどうなんですか。

ボールペンの代わりにサカナで考えてください。元来、日本の沿岸漁業は操業形態や規模の生産の仕組みは環境への影響が小さい形態が多いのです。しかし、漁業者が自主的に資源管理し、漁獲規制していることを、漁業者サイドは常識であっても、消費者はほとんどその事実を知りません。安全性や価格情報は消費者に伝達されてきましたが、「環境負荷」の情報はなかったといつてよいでしょう。

現在、世界的に魚のエコラベルとして広がっているのが、MSC認証制度です。MSCは、Marine Stewardship Council（マリン・スチュワードシップ・カウンシル）で、日本語では「海洋管理協議会」という国際的組織が作られています。Sのステュワードシップは「管理」という訳語を使っていますが、資源を維持したり育む「子守り」の「守り役」の意味が含まれています。国が資源を管理するという意味とはすこし違います。



アマタ株式会社 HP より—サケ缶詰につけられた MSC ロゴマーク

サカナにエコラベルを貼る手法はこれからの課題ですが、漁協や漁業者が、環境に配慮して海を守ってきた証明書のように利用することもできます。また、どこで漁獲しどこに水揚げし、どういう流通をたどり売り場に並べられたという「履歴」（トレーサビリティ）も表した認証も可能です。

エコラベルのついた魚を買うことが、結果的に消費者を生産者に結びつけることになるでしょう。消費者側からすると「生産者の顔」の見

えるサカナを購入しているという親しみ、安心感につながるわけです。

エコラベルを導入するコストはまだ高いのですが、漁業者と市民を、これまではむずかしいとされてきた「環境を守ろう」という共有する意識で結びつくことができるようになれば、漁業の産業としての価値を高めることにつながります。

市民に開かれた漁業という課題があります。エコラベルつきサカナを通じて、漁業者側から市民にアピールすれば、消費者である市民はきっと好意を持って答えることになるでしょう。自然産業としての漁業者が試みる価値があることをもっと知ってもらえるように、MSC ラベルの調査研究を進めるとともに、MSC ラベルに向いていない漁業のために、より利用しやすいエコラベルシステムをこれから開発し提案していこうと考えています。

(取材：2006年11月)

- エピローグ：田村さんは、北海道野付漁協婦人部の女性たちがすすめる「漁民の森」植樹運動の現場にでかけ、日本海岸イワノリ漁業者からの聞き取りなど全国の漁業現場に足を運び漁業者や現地の人々の智恵を学び仕事のアイデアにつなげる「現場主義」を実践しながら、大きなテーマを熱を込めて語ってくれました。

copyright 2002~2007, manabooks-m. nakajima,
& Mieko. Kakuta, & JFkyousuiren